

人の身の上

小川未明

青空文庫

お花^{はな}は、その時分^{じぶん}叔父^{おじ}さんの家^{うち}に雇^{やと}われていました。まだ十七、
 八^{じよちゆう}の女^{じよちゆう} 中^{ちゆう}でありました。小学^{しょうがっこう}校^{がっこう}へいつていたたつ子^こは、
 毎^{まい}日^{にち}のように叔父^{おじ}さんのお家^{うち}へ遊^{あそ}びにいつていました。叔父^{おじ}さ
 んも、叔母^{おば}さんも、たつ子^こをかわいがつてくださいましたから、
 ほとんど、自分^{じぶん}の家^{うち}も、かわりがなかつたのであります。
 叔父^{おじ}さんの家^{うち}には、お花^{はな}のほかにも、もう一人^{ひとり}お繁^{しげ}という女^{じよちゆう}
 中^{ちゆう}がおりました。年^{とし}はかえつて一つか二つ、お花^{はな}よりは少^{すく}なな
 ったかもしれませんが、よく働^{はたら}いて、よく氣^きがついて、氣^きの短^{みじか}い
 叔父^{おじ}さんの氣^きにいりでありましたけれど、どういふものかお花^{はな}は、
 よくいつかつたことを忘^{わす}れたり、また、晚^{ばん}になると、じきに居^い

眠りねむをしましたので、よく叔父おじさんから、小言こごとをいわれていまし
た。

「もつと、氣きをしつかりもたなければならんじやないか。」と、
叔父おじさんにいわれると、

「はい……はい。」といつて、さすがに、顔かおを赤あかくして返事へんじをし
ましたが、すぐ、その後あとから忘わすれたように、物もの忘わすれをしたり、
夜よるになると居眠りいねむをはじめました。

これにひきかえて、お繁しげのほうは、なにからなまでに、よく氣き
がつきました。それでありますから、よく叔父おじさんにも、叔母おばさ
んにも、かわいがられていました。叔母おばさんは、なにかにつけて
もお花はなを不憚ふびんに思おもつて、「よく、氣きをおつけ。」と、やさしくい

い聞かされました。

けれど、やはりだめでした。お花は、いいつけられた用事を満
 足にしたことがなかったのです。叔父さんは、

「あの子はだめだ。ほんとうに、ろくな暮らしはしないだろう。」
 と、叔母さんに向かつていっていられました。

「ほんとうに、困ったものです。」と、叔母さんは、眉をひそめ
 て答えていられました。ある日のこと、叔父さんは、お花が、と
 ても役にたたないから、暇をやってしまうと、叔母さんに向かっ
 ていっていられました。

たつ子は、そのそばにいて、いわれたことを聞いていたのであ
 りますが、お花がこれまで自分にやさしかったこと、あるときは、

丁寧ていねいに髪かみを結ゆつてくれたこと、あるときは、お手玉てだまを作つくつてくれたことを思おもい出だすと、なんだかかわいそうでなりませんでした。「叔父おじさん、お花はながかわいそうです。どうかお家うちに置おいてください。」と、叔父おじさんにお願ねがいいたしました。叔母おばさんもまた、「わるいという性せい質しつではなし、気きがきかないというだけなので、すから、もう一度ど、よく、わたしからいい聞きかせますから。それで、いけなかつたときに、暇ひまをやることにしてください。」と、頼たのまれました。

そのときは、二人ふたりの言こと葉ばに、やむなく、気き短みじかかの叔父おじさんも我が慢まんをせずにはいられませんでした。たつ子こは、心こころの中うちで、もしお花はながこの家うちから出だされたら、その先さきは、どんな家うちにゆくであろう

か、どこへいってもしかられはしまいか、そして、その行く先が
 いい家ならいいが、もしも、よくない家であつたら、かわいそう
 だと思ひました。もう一つは、お花と別れたら、おそらく、もう
 永久に、その顔を見ることができないであらうと思つたので
 ありました。

しかし、お花はどうしても、叔父さんの氣にいりませんでした。
 そして、ついに、そのお家から暇を出されるようになったのです。
 お花は、泣いて出てゆきました。そのときたつ子も、どんなに悲
 しかつたでありましょう。やはり目を真つ赤に泣きはらしていま
 した。そして、「どこへいっても体を大事にしてね。」「遊びに
 いらつしやいね。」といいました。すると、お花も目から涙を流

して、

「どうぞ、お嬢さんじょうさんも、お達者たつしやでいてくださいましね。」とい
つて、たもとを顔かおにあてて泣なきました。

つきひ

月日のたつのは早いはやもので、そのときから、もう六、七年ねんはた
ちました。その間あいだに叔父おじさんは、病氣びようきでなくなつてしまわれま

した。ある日ひのこと、お友ともだちといつしよに街まちを歩いてみますと、
あちらから子供こどもをおぶつてくる、若い美わかしい女おんながありました。で、
よくその顔かおを見みますと、忘れわすれないお花はなでありました。

お花はなはあののちお嫁よめにいつて、おかあさんとなつて、子供こどもをも
つたのでした。

「お花はなじゃなくなつて？」と、たつ子は急こに声きゆうをかけますと、

「ああ、お嬢さんでございますか。こんなに大きくおなりあそばして？」と、お花はびつくりいたしました。

「だんなさま、奥さまは、お達者でございますか？」といつて、お花は、叔父さんや、叔母さんのようすを聞きました。ですから、たつ子は、叔父さんが、おとしなくなられたことを話すと、「すこしもぞんじませんで……。」「といつて、お花は泣くのでありました。

その日、たつ子は、家に帰つてから、叔母さんの家へいつて、お花に道であつたこと、お花が、いいおかみさんになつて子供をもっていることなどを話しますと、叔母さんは、うなずきなされ

「よく、ぼんやりしていて、叔父おじさんにしかられたが、あのときは、からだ体がよくなかったのでしょう。しかし、せいしつ性質は、やさしい、いい子こだから……。」「といわれました。それにつけても、お繁しげは、どうなったか、たよりがありませんでした。たつ子こは、いまさらながら、人間にんげんの一生しょうは、だれにもわかるものでないことを感じかんたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

底本の親本：「気まぐれの人形師」七星社

1923（大正12）年3月

※表題は底本では、「人《ひと》の身《み》の上《うえ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2019年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人の身の上

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>